

学校と家庭の生活指導

子どもたちが抱える生活現実の困難さと向き合い、生活指導の課題と筋道を明らかにする

竹田 正直

黒谷 和志

分科会第一日目

はじめに

本分科会では次の四つの研究課題を設定した。①格差・貧困の社会の中で子どもたちの生活はどのように変化しているか、②子どもと向き合い、子どもたちが安心できる場をどのようにつくり出していくか、③子どもの現実と響き合う自治と学びを探る、④子ども一人ひとりの成長・発達と子ども集団の発展を支え合うおとなの共同をどのように

つくり出していくか。分科会第一日目は、まず自己紹介を兼ねて、各参加者がどの研究課題に関心を持って参加しているのかを交流した上で、レポートの検討に移った。第一日目は、研究課題①及び③に関連するレポートと研究課題②に関連するレポートの一部について報告をもとに学びを深めた。以下、検討した順に、レポートの概要とそれに基づいて行われた討論について報告したい。

一 行事への取り組みを通して「競争の文化」から「連帯する文化」を立ちあげる

芦別の松村さん（高校）は「担任生活半年を終えて」の中で、クラスで取り組んだ行事について報告された。例えば、学校祭では、クラスが助け合い、支え合って準備や練習に取り組めないでいた。松村さんは行事に取り組む中で見えてくるクラスの課題や前進を「通信」に取り上げ、教師としての「願い」を綴ることで、生徒が自らの活動を振り返り、経験から学びを深める機会をつくられている。また、「通信」やHRを通して、基地問題やストリートチルドレンなど、生徒が社会問題と出会いながら自己を育んでいける学びの場も設けられている。

宿泊研修でのクラス対抗競技、学校祭での合唱やパフォーマンス、球技大会、総合的な学習の時間でのクラス対抗ゲームなど、スポーツ面でも芸術面でも結果を残せないクラスを見て、松村さんはクラスとして「勝利」や「達成感」を味わって欲しいと今後の目標を立てられている。

討論では、まず、一見まとまりを欠くように見えがちな生徒たちの様子の中にも、松村さんの思いを受けとめ、前進している姿があることが確かめ合われた。また、行事に競い合いが持ち込まれる時、競争での勝ち負けに囚われがちになり、そのことで楽しく参加できない子ども、排除されてしまう子どもが出ることもある。どのようなねらいや課題を子どもたちと設定して取り組みの過程を充実させるか、また取り組みの過程の中で共同できたことの達成感を味わえてくことが大切ではないかといった意見も出された。さらに、貧困や格差をめぐる子どもたちの状況について、経済的貧困によって子どもたちの進路選択の幅が狭められたり、進路実現要求が剥奪されている現状や、子どもの学力や発達を保障する生活環境や文化が貧困化している状況があることが課題として交流された。

二 子どもの実と響き合う共同と自治の世界を立ちあげる

富良野の松代さん（高校）は「本校生徒会活動の課題と今年度の重点的取り組み」の中で、行事のみならず、日常の学校生活で自治の力を育てていくことを当校の課題と捉え、「常任委員会やクラスの自治をどう育てるか」、「生徒会執行部や常任委員会の活動を理解し、支持してくれる勢力をどう組織していくか」という点を生徒会活動の重点課題にして取り組まれていることを報告された。

例えば、常任委員会の活性化に向けた取り組みとして、執行部会議で前年度各委員会の活動状況を分析し、執行部と各委員会との相互交流を密にするための「執行部・常任委員長合同会議」を開催することを決め、さらに「年間目標」「活動方針」「年間計画」が具体的に実施されるような計画を立てるなどの要請を執行部から各委員会に行われている。それを受け、各委員会が担当教員と「年間目標」「活動方針」「年間計画」の「原案」を作成し、執行部主催の一斉常任委員会を経て生徒総会で提案する取り組みを行っている。

また、学校祭の総括として、生徒指導部が捉える学校祭

の意義・方針案を示し、職員会議等で話し合いながら担当教員と他の教員との間で学校祭の意義・方針について共通理解を図っていくことが今後の課題であると報告された。

討論では、小中学校での生徒会活動の状況についても交流された。子どもたちが意見表明でき、その実現のためにはどのようなことが必要なのかを学びながら、子どもたちが学校の文化をつくり出していく取り組みが求められている。また、教科外で活動できる時間が少なくなっている状況や、しかしやらなくてはならない活動として形骸化している状況があり、「自分たちの生活を自分たちで築いていく」力を育てていく活動になっているかという点から活動を吟味していくことが必要であるという提起もあった。

松山の田澤さん(小四)は「心と人間関係と表現力を育むために」という報告を行われた。田澤さんが担任する学級には、友達に暴力的に関わってしまう子どもや感情がいつ爆発するかわからない子どもたちが存在し、子どもたちの人間関係の中にも敵対関係や排除し合う関係があった。しかし、田澤さんは、そのような課題をやっかないものとして捉えるのではなく、子どもたちが成長し続けるために必要なものと捉え、関わりを深められている。また、「心の堅さ」を抱えていてうまく他者や自己と向きあえない子どもたちを前に、どうすれば「心をやわらかく」して生活できるよ

うになれるのかと問いながら実践されている。

田澤さんは、次の四点を大切にされている。①子どもの言葉の足りなさや感情のぶつかり合いを丁寧に解きほぐし、どのような表現方法がいいのかを共に考えていく。②子どもたちは、けんかやぶつかり合いを通してながら自分と向き合ったり、関係づくりを学んでいく。感情を表に出せずため込こまぬよう、日常的に安心して語れる関係や場所を作っていく。③その子らしさを大切にしながら、学習や生活場面で人の考えや気持ちを理解したり、協調性を育てていく。④授業がわかり、大事なことが心に染み入り、集団として力を高めるために、集中心力を持続できるようにする。

また、保護者と子育てや教育について共通理解を図ることも大切である。特に、田澤さんは、子どもは社会的関係の中で育っていくからこそ、自分の子どもが育つためには、まわりの子どもたちも一緒に育てていくことが必要であること、そのために教師やおとながどう関わるかが問われていることを、保護者と共通に理解し合おうと働きかけられている。

討論では、親も生きづらさを抱え子どもとじっくりと対話することが困難な状況に置かれていること、親は子どもとともに親になっていくと言われるが、親が孤立した状況にあり、手のかけどころを学ぶ機会を奪われている状況が

あることが指摘された。教師が親と対話しながら、親の目に映りがちな子どもの姿とは違うその子のよさを伝え共有していくことや、わが子に返すべき言葉を見つけあぐねている親と共に、生きづらさを抱える子どもの言葉を受けとめ直し、子どもに応答する言葉を共に探っていく場をつくることも求められているとの報告もあった。

三 子どもの「荒れ」の中にある発達要求を読みひらき、それに応答する関係性を築く

根室の竹岡さん(中三)は「光洋での日々卒業へ向かって」の中で、荒れる生徒たちの中心にいるAとの関わりを中心に報告された。竹岡さんは、荒れる生徒たちに管理的に関わるのではなく、「生徒の心に寄り添うこと」「信頼関係をつくること」が一番の近道である、成果を求められがちになる教育の動向に流されることなく、地道にあきらめることなく関わり続けることが求められていると報告された。竹岡さんは、Aのことを見捨てることなく絶えず働きかけ続け、まず竹岡さんがAにとって信頼できる他者であろうとされている。

竹岡さんは、Aとのつながりを深めるために、まずAの

荒れる言動の中にあるうまく表現され得ていない要求を丁寧に読み解き、それを受けとめようとされている。Aの行為は周囲の目から見れば「荒れ」と映りがちになる。Aの言葉には普通に聞けば「それはないんじゃないか」と思えるようなものもある。しかし、竹岡さんは、その行為や言葉の善し悪しを外側から判断するだけではなく、その行為や言葉の意味をAの内面の物語に沿って読み解こうとされている。また、竹岡さんはAの自己肯定感を育むことを大切にされている。Aは生育史の中で他者や自己への基本的信頼感を十分に育んでこれなかった。竹岡さんは、「普段いいことを書いてやれない」連絡票にAの成長した姿を書き記されている。また、不満や苛立ちのはけ口を求めて荒れるAの中にある「何とか名をあげたい」という要求を受けとめAと行動を共にされている。「何とか人前に立つて何かやりたい」という気持ちを持ちながらもそれを素直に表現できないAが、文化祭で役割や出番を得られるよう配慮されている。

そして竹岡さんは、Aと関わり続けることができ、Aの変容を支えてきたのは、学校職員が責め合うことなく共同し、辛いことを分かち合い、苦手なことを補い合い、指導方針や子どもの見方を確かめ合うチームとしての関係があったからだと言及された。

討論では、Aの家庭とどのようにつながりを深めていくかという点や、Aの居場所を学級の中に広げていくためにも、他の子どもたちがAの変化を共有し、Aに対する認識を変えたり深めていく学びが大切なこと、さらに、荒れる学級の中で全ての子どもたちの学習する権利をどのように保障するか、授業に参加しないAを含め、子どもたちの生活現実と響き合う学びをどのようにつくり出すかという視点も必要となることが課題として交流された。

第一日目 黒谷和志

分科会第二日目

四 子どもの現実とひびき合う自治と 学びを探る

1 小学校の実践

(1) 小学校低学年の実践 「友達じゃなくて、いいの」は、R子が教室で別な子にハエと間違ってたたかれたのをM子が笑い、先生と三人で話し合っても、反省し誤っているM子を「友達じゃなくて、いいの」と許さない。翌日、R子が「腹痛で休み」、母親と話して、一年生からトイ

レなどでM子にいじめられたことを知る。

R子の家庭訪問をすると、M子とともに先生も怖いという。指導方針として、①「個人ノート」による「対話」で、子どもとの信頼をきづく、②遊びをとうして「居場所つくり」をめざし、楽しい友達がいる二十七人の学級こそ安心・安全の場所とする。

R子は書くのが大好きで三ページも書いてくる。「遊びクラブ」の一つ「たんけんクラブ」を六人で作り休み時間も嬉々としている。M子がクラブに入りたいということ、「いじめたから入れない」と言う。M子は、母親の「きちんと」の連発や兄の命令口調の影響で、男の子にもドスをきかせて命令する。先生は、M子と①「命令しない」、②「友達の考えを聞く」ことを約束した。

学芸会の練習のころ、「五歩ぶつけ」のあそびのなかにR子とM子がいた。劇の衣装の紐がとけないときR子はM子に頼んでいた。再び三人の話し合いをししぶ承知したR子はM子に、「遊びのルールを守ること」「みんなの意見をきいてほしい」と要求し、M子も約束し、三人の指をあわせ「一緒に楽しく遊ぼう！オー」と誓った。ようやく二人の関係は対等なものに近づいてきた。

(2) 「心が通い合う関係づくり」は、同じく、小学校低学年十一人の人間関係のひずみの問題を取り上げる。子ども

もたちは素直で優しく、純朴で勉強もよくする。保護者も協力的だが、施設から通っている二人の男の子、S男とT男は、なんとなくほかの子から下に見られ、女子は助けようとしめない。トラブルにはいつもこの二人がかかわっている。

S男は、恥ずかしがりやで、小さい子をいじめたり、うそをついたり、よく叱られているし、T男は気持ちを表現できず、遊びたいのに、「突然追いかけられた」と友達に逃げられ、学習にも時間がかかる。

先生は、学級目標を「だれもが大切にされ、元気で温かい学級・集団づくり」とする。

この二人に個別的に、一対一や、抱っこしたり、手を握ったり、ほめて頭をなげたりし、良いときには、みんなの前で大きく評価し、二人を助けた女子を少し大げさにほめたりした。秋の学芸会は劇となり、公募で配役を決め練習にはいった。女子よりせりふの覚えが悪い男子も後半がんばり、S男とT男も施設の職員の間ましもあって立派に劇を演じ、自信をつけてき始めた。

(3) 「どうして?なんで?の毎日から語って、つながって」は、二十九名の小学校高学年の実践である。四、五人の目立つ子どもがいる。暴力的でカツとなるS男でスクールバンド所属、目つきが悪く反抗期のH男でサツ

カー部所属、女子には、不登校と男子が距離をおく子、クリニックに通う子などで、四月から暴力的トラブルの多い日々である。目標として「子どもたちが、自分たちの世界を、自分たちで作りあげてゆく」とし、S男やH男のトラブルの中の願いを他の子に伝え、後追いでない積極的指導、分かり合える場の設定を実践する。

三つのことを行った。一つは先生との希望による班か個人の交換ノートで主に女子が参加。二つは自由班編成を二学期から「希望を書き担任が調整」にし、三つは教科リーダーを決め、授業準備の目標競争をした。S男もH男も第1希望の男子と同じ班になり少し安定し、S男は班長にもなった。ノートに二人のトラブルや背景がかけられるようになり、S男の暴力も人から物へと変わり、子どもたちにも待ちの姿勢が始めているし、教職員全体が子どもをみんなで温かく見守るようになってきている。

(4) 三つの実践をめぐる討論

「友達じゃなくて、いいの」については、M子の自己中心、R子のかたくなさと文章力の高さ、の特徴や父親が両方とも地域の知的エリートであることなどなどの関係が指摘された。二人とも居場所がありパワーもあるし、この関係ははじめではなく、親がはいっていいじめにした

てているのではないかとこの疑問もあった。

「心が通い合う関係づくり」では、施設から通っているS男とT男を下に見るのは、地域での施設への見方の反映でないかとの意見もあったが発表者は、施設は開放的だし、施設があるおかげで複式にもならず、親たちは好感を持つている。しかし、二人の良い点、走るのが速い、九九が良くできる、暗唱能力が高い、など実名をだして通信で評価してあげたくとも施設の要望で実名をだせない。

「どうして？なんで？の毎日から」については、S男もH男も発達障がい傾向が指摘され、しかし、H男の母は中学年で安定していたのに高学年で問題が出てきたのは学校のせいだという。たしかに、児童七百人、教員三十人の学校で、教員の出入りが多く、産休代替期間もろび、担任などの職務分担が一年ごとにかわっている。保護者との関係を作れない新任教師が一年でギブアップした例もある。

2 中学校の実践

(1) 「彩りある子ども達とともに」は、中学校の実践で、産休、子育てと数年ぶりに担任を持つことになったクラスは、二日目から喧嘩がはじまる。B男が教室の入り口付

近で友達と話していると、特別支援を必要とする引継ぎされたA男が、B男の友達にぶつかって倒し、A男は誤らずに席に座った。B男が怒ってA男の机をたたき、腹をたてたA男がB男にかかっていき喧嘩となった。二人への個別指導と、家庭訪問、その後、小学校からAが切れるととめてきたC男に助けられてA男は落ち着いてきた。B男もクラスリーダーとして活躍している。

(2) 「私の学級づくり」も中学校の実践で、地域は貧しく、給食費を払えない、歯科にいけない子もいる中で校内が不安定になっている。しかし、学力向上のスピードがもとめられ子どもとゆつくり話す時間が取れない。時々、キレて暴力的になるA君の家庭訪問で、親が「この子は私たちの宝です」という言葉を聞いて、先生はどんな子も決して見捨てないとの決意をする。学級通信や個別の悩みノート、スポーツを大切にして取りくむ。徘徊、タバコ、暴力の四人の三年生にたいしても全校集会や家庭訪問、二年女子の生徒会長の四人を見捨てないとのメッセージで四人は徐々に変わってゆく。

(3) 討論では、二千二百円のリーダーを買えない子のいる地域の貧しさと子どもの不安の中で、二年と三年の対立にせず解決していく指導が評価され、公共性をもつ自治関係のひろがり子ども認識の発展を重視するように

との意見もあつた。

3 高校の実践

(1) 「男子八名の担任としての取り組み」は、すでに、募集停止が決まっている小規模高校の実践で、生徒は素直で大きな問題は無いが、基礎学力の向上が課題である。一年生で英語のテストが十点前後、漢字が小学校低学年という生徒もいる。書くことや発表が苦手である。「朝テスト」を提起し、助け合いとともに、過剰な援助をせず自主的成長を待つことも大切になると、生徒は喜んで取り組んでいる。

(2) 「初めて担任をもって」は、高校三年の女生徒の多い十六人のクラス担任になつた実践である。生徒や家庭との連絡に通信を二年半で五十七号だした。自閉症のA君について親が公表しないというなかで、A君を中心に次々とトラブルやいじめがでてくる。女子は、くさい、汚いとA君を避ける。見学旅行へ一緒に行くかが問題になり、コーディネーターの先生をつけて一緒に東京へ行き、それが自信になりA君も少しずつ周りのことを考えられるようになってきた。

(3) 「都市部の高校にとって『地域』とは何か」は、都市部の高校で、自転車通学が禁止されていることへの指導の

難しさを取り上げたものである。発表者も赴任当初は、学校に駐輪場が無いことや学校周辺の交通量の多いさゆえに、自転車通学禁止もやむなしと考えたが、朝、校舎近くで、違反通学者の指導をしてみると交通量の多い道路での指導は、指導する教師も危険であるが、それ以上に、急に逃げる生徒は実に危険である。学校に駐輪場が無いことは、むしろ、学校側の問題であり、安全性に配慮しての自転車通学は社会常識でないか、と疑問をだし、「等質地域」や「機能地域」の概念で学校と地域の関係を再検討すべきと問題提起している。

(4) 「やつぱり、高校はおもしろい！」は、六年ぶりに一年生の担任を持った先生が、学年の教師五人と「退学者をださないとりくみ」をめざし、感動と学力、行動力を生徒につけようと努力する。母子家庭のA子は、朝起きれず遅刻が多く、夏休み後はほとんど来なくなる。B子は、ほとんど話さず、話しても蚊の鳴くような声で話す。そのB子が生徒会役員に立候補し、クラスではだれも応援演説の責任者になりたくない中で、メールで上級生にたのみ、当選する。しかし、役員会では一度も発言しない。動機は不明である。また、最初の退学がこのクラスからでた。

(5) 討論では、禁止しても七、八年前までは、全校の半分は

自転車であって、近くの公園に百五十台くらいも放置されていた。荒れた子を退学させると地域で問題のある先輩たちとつるむ事もある。中学校で皆勤の生徒が、高校1年になって一週間の実習を休んだあと、「クラスにはいけない」と別室登校になり、雪が降ると学校に来なくなり退学してしまう。携帯やブログのことも問題となった。

(6)新自由主義による格差の増大は、地域社会や家庭の貧困をもたらし、授業料を払えない生徒、学用品を買えない子どもが出てきている。実験、実習や授業で使用する教材も、共用品や備品として学校予算から購入できる道もある。貧困や家庭崩壊は子どもにキレル、暴力、いじめなどとして反映している。学力向上のスピードが管理職から追及され、子どもたちへの丁寧な時間をかけた指導がなおざりにされてきている。どういう子どもを育て、どういう力を子どもにつけるかを、教師の間で、地域の保護者と語り合い、要求する力、連帯する力、語る力、選ぶ力なども、学力とともに子どもたちに育てていくことが求められている。

第二日目、竹田正直

(北海道教育大学旭川校)

(北海道大学名誉教授)